井上泰至著

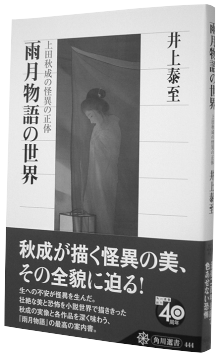
『雨月物語の世界
―上田秋成の怪異の正体』

山本綏子

本著が刊行された二〇〇九年は、上田秋成が没してからちょうど二百年目にあたる。二〇〇九年には、二百年忌を機に、秋成研究の原点を振り返る著書が多く発表された。本著もその一つといってよいだろう。ここ数年、秋成以外の分野で次々と著書を世に問うてきた井上泰至氏が、改めて秋成の「代表作」である『雨月物語』に正面から切り込んだのである。

本著には、『雨月物語』読解のために伝統的に行われてきた方法が多く採用されている。いわゆる典拠論や、キーワード（「夢」・「声」・「廃墟」など）を軸に作品を読み取る方法、秋成の実人生と照応させる方法などである。しかし、そうでありながら、本著は時代に逆行するものではもちろんない。いったん秋成とは異なる領域を見渡してきた井上氏だからこそ実現できたともいうべき、新しい切り口が随所に見られる。

本著の章立てを見てみよう。第一章「「生」の不安―怪談とその小説が生まれる基盤」、第二章「幻術の文法―怪異表現の視覚と聴覚」、第三章「文人作家の誕生―秋成の前半生」、第四章「すれちがう主人公たち―作者秋成のトラウマ」、第五章「仕掛けられた暗号（コード）―歌語・謡曲・俳諧」、第六章「もどきの語り口―擬態と再生」、第七章「秋成の軌跡―その後半生」、第八章「廃墟と音―怪異の美の本質」の八章で構成されている。



2009年5月10日発行
角川学芸出版
B6判　224頁
定価 1500円（本体）

これら八章には、大まかにいって、二つのうねりが用意されているように見受けられる。第一章では、怪談とは太平の世において不安を疑似体験することでそれを解消する手段であり、秋成がそのことを的確に捉えていたために『雨月物語』が怪異小説の白眉になったことを述べる。第二章では、『雨月物語』の怪異場面に〈夢〉の表現が多用されることに着目する。〈夢〉が願望の表れであると同時に克服されるべき側面をも併せ持つことを論じた上で、そうした〈夢〉の性質を理解しながらも〈夢〉を志向し続ける当時の文人のあり方に言及している。第三章では視点を変え、秋成の実人生を追うことが中心となる。出生と生い立ちに由来する孤児意識、孤独感を秋成が抱いていたこと、秋成が文芸や学問に携わることを「遊び」として捉えていたことを押さえる。これら第一章から三章までをいったん統合するかのように置かれているのが、第四章である。ここでは、第三章までに述べた秋成自身の孤独感と〈夢〉への執着とが、『雨月物語』の怪異につながっている可能性を示す。これが一つ目のうねりである。

いま一つのうねりは、第五章以降にある。まず第五章で、典拠との関わりから『雨月物語』にしかけられた「暗号（コード）」を読み解き、古典世界の見立てとして『雨月物語』を位置付ける。その上で、知的遊戯の要素が『雨月物語』には欠かせないことを確認する。続く第六章で、軍書や説話の語りの利用方法について論じる。語りという枠組みを利用しつつそこから逸脱していく点に、秋成のアイロニカルな視点を見て取ることができ、「メタ物語作家たる点が秋成の特徴であり本質」であると結論付ける。第五章、第六章で明らかにした手法を、秋成晩年の作品『春雨物語』「血かたびら」を取り上げ、秋成の後半生との関わりから論じたのが第七章である。文業を遊びと捉える意識や、歴史へのアイロニカルな視点が、いくつもの自己矛盾や葛藤をかかえた晩年の秋成のありようにつながっている様を検証する。

ここまでの二つのうねりを踏まえて（当然両者は分断されるものではなく、密接な関連を持つ）、第八章で再び『雨月物語』に立ち戻る。「廃墟」と

「音」とに注目し、秋成が「廃墟」に対して「取り残された「孤独」・「死」の世界」を見ていたこと、それを情を切り捨てた表現で描ききった点に、秋成の「美への没入と相対化」の手法が表れていることを指摘してまとめとする。読者は、二つのうねりに身を任せているうちに、自然に『雨月物語』の核心部へと運ばれてゆくという仕組みである。

特徴的なのは、一般書にしては、あらすじの紹介や本文引用が少ないことである。いうまでもなく、専門的な知識がなくても読めるように、ひとつひとつの記述はきわめて親切になされている。ただ、各編の全体像がつかみにくく、その点でとまどう一般読者も少なくないのではなかろうか。

しかし、井上氏は、もとよりそのことは承知であろう。それこそが本著の眼目だからである。本著は『雨月物語』九編について、一編一編ストーリーを紹介し、主題を明らかにしていくという形式を敢えてとっていない。各章ごとに設定した論点に応じて、複数の編を取り上げる。すなわち、『雨月物語』各編を横断的に見るものである。横断する手がかりは、「怪異」という、きわめて基本的な、そして『雨月物語』という作品の存在そのものに関わる観点である。九編にまたがる総括的な論ながら抽象論に陥っていないのは、論証にあたっては堅実な方法を用いているからだろう。そして、そうした方法に未だ多大な余地があり、しかも有効であることを示している。

ただし、このことは、井上氏の視野の広さがあってはじめて達成できるものである。本著のそもそもの目的は、氏が「『雨月物語』が怪談小説の「古典」となった本質的な理由」（「はじめに―『雨月物語』の怪異の謎」）を明らかにすると述べているように、現代にも通じる普遍的な動機が元になったものである。これを明らかにするために、心理学や言語学といった、文学以外の研究成果が援用される。あるいは、現代の映画なども例として引かれる。こうした方法をとりながらも、援用した諸学に振り回されることはない。一つ一つが慎重に選び抜かれた結果であるからだろう。また、近世の文学、文化をも大いに踏まえていることも、本著で展開される論を支えている。引用されるのは、読本はもちろん、浮世草子・歌書・俳書・浄瑠璃・川柳と幅広い。当然目を配るべき日本の古典についても、和歌、『源氏物語』、『伊勢物語』などから押さえてある。さらに興味深いのは、明治の小説家の言説が幾度か引用される点である。『雨月物語』が明治の文人達へ与えた影響を論じるのではなく、彼らの江戸文化や『雨月物語』への関わり方から、江戸文化なり『雨月物語』なりの特徴を逆照射している。本著が原点回帰ではあるが新しい『雨月物語』論になり得たのは、井上氏のあらゆる分野にわたる博捜ぶりがあったからにほかならない。

個人的には、『雨月物語』と秋成の実人生とを照応させる際に、今少し手順を踏んでもらいたいという感想も持った。秋成自身の記述には、自己演出の要素が多分に含まれていると思われる。秋成自身が語る秋成像と実体としての秋成とが、果たしてどれだけ一致するのかについては、結論を急ぐことができないように感じる。

作品を読むことにおいて、現代的視点と当代的視点とはいわば両輪の関係にある。普遍性は時代が異なっても変わらない人間性ともいうものに関わるし、また当時の文化と切り離すべきでもない。本著は、それらを両立させることに成功した例といえる。一般読者のみならず、研究者にも多くの示唆を与える一書といえよう。

なお、本著執筆の頃、井上氏は御母堂を看取られ、その経験は『雨月物語』理解に欠かせなかったとのことである（「あとがき」）。『雨月物語』が時代を越えて読み継がれる理由において、人の死をめぐる根源的な共感は重要な位置を占めるであろう。「あとがき」に記された私事をこの場で取り上げるのは、適切ではないかもしれない。しかしこのことは、『雨月物語』と同時に、本著について語る上でも重要な意味を持つと感じて触れさせていただいた次第である。

（やまもと　すいこ　藤女子大学文学部准教授）